

念願の初優勝

初日、圧巻の67

4 アンダー、140

74歳の小川 敏（ザ・クラシック）



初日の貯金が初タイトルを後押しした。前半のアウトを2バーディー、1ボギーの35でターンすると、後半のインでは4バーディー、ノーボギーの32。5アンダー、67という圧巻のゴルフを展開した。「相手やスコアのことには気にせず、バーディーを取ることを考えた」と自分のゴルフに徹したのだ。

2日目となった最終日も同じスタイルを貫く。前半が終了し、2位の中島好巳（チェリー

鹿児島シーサイド)とは2打差。2人のマッチプレーになりつつある中で、小川が12番でバーディーを奪い、中島が13番ダブルボギー、14番ボギーとして、その差が「6」になって勝負はついた。「崩れる要素がほとんどなかった。計画的なアプローチをしていた。(グリーン)手前に刻んで1mにつける。それが全て入った」と中島が脱帽する。小川の集中力に加えた緻密なゴルフが優勝につながった。

中島とは少なからず因縁がある。70歳になったばかりの2017年グランドシニアのルーキーイヤー。九州GC八幡コースでの大会で2人はともに7オーバー、151でプレーオフとなり、小川は中島に敗れた。その後、小川はゴルフの調子を崩し、一時はドライバーの飛距離が180ヤードまで落ちたという。そこから一念発起。2年ほど前から週1回のトレーナーをつけ、毎朝ストレッチや腕立て伏せなど40分の運動を取り入れた。さらにクラブシャフトを40gの軽量に変え、今でも試行錯誤しているのだが、飛距離がランを含めると250ヤードまで伸びたそうだ。このドライバーの飛びがバーディー量産を生んだ。



1947年、千葉県茂原市生まれの74歳。3歳から父親の影響でゴルフを始め、東洋大ゴルフ部に所属。大学時代には3歳上に新井規矩雄プロがいた。一時はプロゴルファーを目指した小川だが、「プロのビリよりアマのトップになろう」とアマチュアの道を選んだ。

全国大会出場はプレーオフで敗れた4年前以来、2度目。「ジャパンへ行って、みんなと交流するのが楽しみ。来年のシードを取れるくらいには…」とシードとなる10位以内に目標を置く。「80歳までは現役で」とゴルフ一筋に打ち込む小川が九州チャンピオンとして、どんなバーディーラッシュを披露するか。

《一言》

2位・中島好巳(一時は優勝した小川に2打差となるが、インで崩れて4年ぶりの優勝はならず)「自分のゴルフはある程度できたけど、13番でのダボが痛かった。それまでずっと不調でね。テレビを見ていてヒントがあった。寺西プロが『右サイドで処理をする』と言っていてね。それからショットがまっすぐ行くようになった。目標がジャパンだったので良かったよ。年齢相応のゴルフをする」



手前が9番グリーン、池を挟んで向こうに18番グリーン



広いアプローチとバンカー練習場